

信 行 要 文 ④ 第七回 法華講夏期講習会 第四期

皆さん、おはようございます。

本年度の夏期講習会も本日の第四期をもって終了いたします。例年、十期に分けて行っておりました夏期講習会を、本年度は四期に分けて行い、そのうち本日・第四期の講習会は青年部を対象とするという新しい企画で行っている次第であります。これは宗務院で色々と検討し、また法華講連合会の方々にも御相談しまして、このような形になりました。明年度も、このような形を継続していくつもりであります。

さて、本日お集まりの方々は、言わば支部における活動の中心者であります。そこで、皆さんは昨日と今日に受けた講習会での勉強内容を、御自分の支部に帰りましたら、支部の皆さんにお伝えいただきたいと思ひます。今、宗門は何をしなければならないのかということがとても大切なのでありますが、その目的に向かって心を一つにしていくためにも、是非、支部の皆さんに学んだ内容をお伝えいただきたいのであります。

結論から申しますと、今、宗門は僧俗を^あ挙げて平成二十七年の法華講員五十パーセント増を目指して戦っております。また、その先には平成三十三年の法華講員八十万体勢の構築という、はっきりした目標があるのですから、そこに全力を傾注していくことが大事なわけでありまして。このことをよく御存念いただいた上で、今日のお話を聞いていただきたいと思ひます。

さて、テキストの五ページをお開きください。12『^{にいあま}新尼御前御返事』から始めたいと思ひます。

12 新尼御前御返事

末法の始めに^{ほっし}謗法の法師一閻浮提に充滿して、^{すいせい}諸天いかりをなし、^{きんせい}彗星は一天にわたらせ、^{かんぱつ}大地は大波のごとくをどらむ・^{きんせい}大旱魃・^{きんせい}大火・^{きんせい}大水・^{きんせい}大風・^{きんせい}大疫病・^{きんせい}大飢饉・^{ひょうらん}大兵乱等の^{なら}無量の大災難並びをこり、^{かつちゆう}一閻浮提の人々各々^{きゆうじょう}甲冑をきて^{きゆうじょう}弓杖を手ににぎらむ時、^{みな}諸仏・^{みな}諸菩薩・^{みな}諸大善神等の御力の及ばせ給はざらん時、^{みな}諸人皆死して無間地獄に墮つること^お雨のごとくしげからん時、此の五字の大曼荼羅を身に^{まんたら}帯し^{たい}心に存せば、^{たす}諸王は国を扶け^{のが}万民は難をのがれん。乃至後生の^{のが}大火炎を脱るべしと^{しる}仏記しをかせ給ひぬ。（御書七六四ノ九行目）

この新尼御前というお方は、^{ながさのごおり}安房国長狭郡の領主であった^{なごえともとき}名越朝時の孫の^{きみとき}公時の奥さ

んでありまして、^{しゅうと} 姑 である大尼の退転にも動じないで信心を貫いた方だとされており
ます。

「新尼」というのは、お嫁さんの尼の意味であります。これに対して、姑の尼のことを
「大尼」と言うのです。大尼御前という方は、領家の尼とか名越の尼とも言われておりま
す。この大尼は、大聖人様と同じ安房の土地の方であったということもあって、大聖人様
の御両親のお世話をしたり、また大聖人様を色々とお助けすることがあったと伝えられて
おります。

のちに、大聖人様が宗旨建立をなさると、大尼も大聖人様の信徒となるのですが、実は
竜の口法難の際に退転してしまうのであります。ところが、大聖人様が佐渡からお帰りにな
って身延に入られますと再び信心を^お発こして、大聖人様に御本尊様の下付を願い出られ
るのであります。しかし、この話は皆さんもお聞きになったことがあると思いますけれど
も、大聖人様はその願い出をお断りになるのであります。やはり信心にはけじめというも
のがありまして、一度退転した人が再び信心を始めたからといって、たやすく御本尊様を
下付するというのを、大聖人様はなさらなかったのであります。御書に、

「いかにも不憫だと思ふのだけれども、法華経に背いた人に御本尊を下付することはで
きない」（御書 七六五^ぶ取意）

とあるように、御本尊様の下付を拒絶されたのであります。ここが大事なところでありま
して、たとえ世法の上で重恩のある人であっても、仏法の道理の上から不信謗法を犯して
退転した人には、やすやすと御本尊様を授与できないと仰せなのであります。我々は御本
尊様に対してしっかりとした固い信心の上から拝していかなければならないということ
が、こういったことから学ぶことができると思います。

ほかにも、この話と似たようなことがあります。

^{うつぶさのあま} 内房尼御前がわざわざ大聖人様のおられる身延に訪ねてきたのですが、大聖人様はこ
の時、お目通りを許されなかったのであります。なぜかと申しますと、氏神に参詣したつ
いでに登山だったのであります。そのために大聖人様は厳しくこれを^{いまし} 誡められて、つま
り謗法を^か 責し、法華経の正義を知らせるためにお目通りを許されなかったのでありま
す。

さらに、このような例もあります。^{しもべ} 下部の湯という温泉が山梨県にあるのですが、この
下部の湯に行ったついでに大聖人様のもとに来たという方にも、大聖人様はお会いになら
なかったのであります。今風^{いまふう}に言えば、温泉旅行のついでに御登山するようなものでしょ
うか。そのようなことに対しては、大聖人様はとても厳しく誡められたのであります。こ
れらはすべて、信心の厳しさというものを教えていらっしゃるのです。

御登山の帰りに、少し疲れを癒^{いや}すつもりでお泊まりになるくらいならばあってもいいと
思いますが、物見遊山^{ものみゆうざん}のついでにお山に来るというのは、本来あるべき姿ではないのです。
戒壇の大御本尊様にお目通りするためには、やはりしっかりとした信心、清らかな信心、

謗法を排除した信心が大切なのであります。これが謗法厳誠ということにも通じていくわけでありませぬ。

皆さん方のなかにはこういっただ方はいないと思ひますけれども、やはりこのことはしつかりと心得ていかなければならないと思ひます。これから先、信心の上でも色々なことがあるかも知れませんが、もしもそういうことがあったならば、このお話を思い出して氣をつけていただきたいと思ひます。

さて、ただいま拜読した御文は、末法^{こんにち}今日の混乱の様相を述べられるとともに、かかる末法^{じよくらん}濁乱の時にこそ、この妙法蓮華經の大法が末法の一切衆生を救ひ、国を安泰ならしめるということを示されているのであります。

簡単に通釈しますと、末法の始めに謗法の者達が世界中に充満して諸天が怒り、彗星が天に現れる。この彗星とはほうき星のことでありませぬが、実は昔、彗星が出現するということはけっして良い前兆ではなく、世の中に悪いことが起きる予兆であると言われていたのであります。その彗星が天に現れ、大地震が起こって大地は大波の如く揺れ動き、さらに大旱魃^{かんぼつ}、大火、大水害、大暴風、大疫病、大飢饉^{ききん}、大兵乱^{ひょうらん}等の多くの大災難が一時に起こり、世界中の人々が各々甲冑^{かっちゆう}を着て弓矢を手握る時、つまり戦争^{ぼっぱつ}が勃発して諸仏、諸菩薩、諸大善神等もこれを防ぐことができずにいる時、天下の人々が皆死して、無間地獄に墮ちる者が雨の降るように多い時、この妙法蓮華經の五字の大漫荼羅を身に持つて心に信じれば、諸王はその国を助け万民は災難を逃れ、後生^{ごしょう}には無間地獄の大火炎から脱れることができるであろうと、仏は記し置かされているのである、ということでありませぬ。

このように、末法濁悪^{こんとん}の混沌とした世相を述べておられるのですが、まさにこの窮状^{きゅうじょう}を救う唯一の秘法こそ、妙法蓮華經の大御本尊であることを、はっきりとお示しあそばされているのであります。

今日、様々な災難が世界の至る所で頻発していることを考えますと、一人ひとりが妙法広布の使命を感じて、仏国土実現へ向けてなお一層の精進をしていかなければならないと痛感する次第であります。

大聖人様は『立正安国論』の冒頭に、

「旅客^き来たりて嘆いて曰く、近年より近日に至るまで、天変^{ちよう}・地天^{ききん}・飢饉^{えきいあまね}・疫癘^{えきい}遍く天下に満ち、広く地上に迸^{はびこ}る。牛馬^{ちまた}巷に斃れ、骸骨路に充てり。死を招くの輩^{ともがら}既に大半に超え、之を悲しまざるの族^{やからあ}敢へて一人も無し」(同 二三四)

と仰せであります。そして、そのように世の中が乱れる原因について、同じく『立正安国論』に、

「倩^{つらつら}微管^{びかん}を傾け 聊^{いささか}経文^{ひら}を披きたるに、世皆正に背き人^{みな}悉く悪に帰す。故に善神国を捨て、相去り、聖人所^{かえ}を辞して還らず。是を以て魔来たり鬼来たり、災起^ここり難起^{なん}こる。言はずんばあるべからず。恐れずんばあるべからず」(同)

と仰せになっているのです。

この御文に示されるように、今日の様々な混乱、不幸、苦悩、これらのすべての原因は「世皆正に背き人悉く悪に帰す」る故であります。大聖人様は仏法の鏡に照らして、これが世の中の混乱と不幸と苦悩の原因であると、『安国論』のなかで明言されているのであります。

大聖人様の正法正義に反する行いをしているならば、それは邪義であります。

「悪に帰す」の悪というのも邪義であります。ですから、邪義邪宗の害毒ということがどれほど恐ろしいかということ、我々はよく知らなければなりません。そして邪義邪宗は、私達が破折しなければ絶対に滅びない。これは明らかであります。

このようなことを言う人はいないと思いますけれども、「邪義邪宗の者どもは謗法を犯しているのだから、いずれ天罰によってだめになってしまうだろう」などと考えてはいけません。それはたしかに一理あるかも知れませんが、そんなことを言っているだけでは広宣流布はできません。

実際、天理教にしても、あるいは阿弥陀経の念仏にしても滅びておりません。なぜ滅びないのでしょうか。我々が折伏しないからであります。放っておけば、悪は増長してくるのです。ここが大事であります。だから、我々の折伏以外に世の中を正しくしていく道はないのです。我々は邪を滅^{じや}していかなければならないのです。謗法をしっかりと破折することが大事なのであります。

大聖人様が仰せのように、結局、人がことごとく悪に帰するが故に様々な災難が起きるのです。これは仏法の依正不二の原理によって明確に示されております。だから、その悪を滅する、邪を破折するということ、今日の我々がなすべき大事な使命があるのです。

ただ単に平成二十七年に向かって、数の上だけで目標を達成しようというのではないのです。真の世界平和を、真の仏国土を本当に実現するためには、今、我々が立ち上がって折伏をしなければなりません。それ以外の道はないのです。今日お集まりの青年部の皆さんは、このことをしっかりと胸に刻んで、御自分の支部にお帰りになったら本当に真剣に、広宣流布のために戦っていただきたい。世のため人のため、皆の幸せのために、私達が身を粉にして戦っていくことが大事なのです。まさにこれが地涌の菩薩の眷属の使命なのです。

もう一つ大事なことは、この依正不二の原理です。悪を破折しなければ幸せになれないという原理が解らなければ、世の中を救っていくことはできません。このことが『立正安国論』の御理想実現のための折伏の大事であると、是非、一人ひとりが知っていただきたいと思っております。

次に 13『四条金吾殿御返事』であります。

13 四条金吾殿御返事

此の経聞を受きまうくる人は多し。まことに聞き受くる如くに大難来たれども「憶持不忘」の人は希なるなり。受くるは易やすく、持たつは難かたし。さる間成仏は持つにあり。此の経あを持たん人は難そくにい値しつふとくべしと心得て持つなり。「則為疾得無上仏道」は疑ひ無し。(御書七七五一二行目)

これは四条金吾殿に与えられたお手紙であります。

四条金吾殿の正式な名前は、四条中務三郎左衛門尉頼基と言います。金吾とは、中国の漢の時代に宮門の警備や天子の警備に当たった武官である執金吾の略称であり、左衛門尉という官職にあったことから、このように呼ばれているのであります。北条氏の支族の江馬家に仕えていた武士でして、奥さんは御書にもよく出てくる日眼女であり、月満御前・経王御前というのは四条金吾の子供であります。また、四条金吾は武術に優れ、医術にも精通していたようであります。

建長八(一二五六)年、二十七歳の時に、池上兄弟や工藤吉隆などと前後して大聖人様に帰依したと言われております。以来、大聖人様の外護につとめて、有名なところでは文永八(一二七一)年の竜の口法難で、じゆんし殉死の覚悟をもってお供をしたという話が『種々御振舞御書』のなかにあります。

この『種々御振舞御書』のなかには、竜の口における色々な状況をお書きになられておりますけれども、そのなかに、

「ゆいのはまにうちいでて、御りやうのまへにいたりて又云はく、しばしとのばら、これにつぐべき人ありとて、中務三郎左衛門尉と申す者のもとへ、熊王と申す童子をつかはしたりしかばいそぎいでぬ。今夜頸切られへまかるなり、この数年が間願ひつる事これなり。此の娑婆世界にできじとなりし時はたかにつかまれ、ねずみとなりし時はねこにくらはれき。或はめに、こに、かたきに身を失ひし事大地微塵より多し。法華経の御ためには一度も失ふことなし。されば日蓮貧道の身と生まれて、父母の孝養心こころにたらず、国の恩を報ずべき力なし。今度頸を法華経に奉りて其の功德を父母に回向せん。其のあまりは弟子檀那等にはぶくべしと申せし事これなりと申せしかば、左衛門尉兄弟四人馬の口にとりつきて、こしごへたつの口こにゆきぬ。此にてぞ有らんずらんとをもうところに、案にたがはず兵士どもうちまはりさわぎしかば、左衛門尉申すやう、只今なりとなく。日蓮申すやう、不かくのとのばらかな、これほどの悦びをばわらへかし、いかにやくそくをばたがへらるゝぞと申せし時、江のしまのかたより月のごとくひかりたる物、まりのやうにて辰巳のかたより戌亥のかたへひかりわたる」(御書 一〇五九)

という御文があります。竜の口法難の時に、四条金吾は決死の覚悟で大聖人様のお供をしたのであります。そして大聖人様がまさに頸を切られんとした時に、江の島の方角から光り物が現れて、太刀取りの目がくらみ、ほかの兵士どもも皆ひれ伏し、とうとう大聖人様

を切ることができなかつたのであります。その時にお供していたのが、この四条金吾であるということでもあります。

この光り物についてですが、これは本当に不思議な現象でありまして、詳しいことは御書の上からしか拝することができません。仏法の上から言うと、日・月・星の三光天子ということがあります。江の島の方角から現れた光り物は、このうちの月光天子でありまして、いわゆる諸天善神の意味であります。諸天善神が末法の法華經の行者を守護されるということを現証として示されたのが、この竜の口における「江のしまのかたより月のごとくひかりたる物」が現れたということなのです。結局、その時の幕府の力、政治権力をもってしても、大聖人様の頸を^は刎ねることはできなかつたのです。ですから、諸天善神の^{はたら}用きというものは、とても大切なものがあるということなのであります。

さて、四条金吾は文永九（一二七二）年に大聖人様より人本尊開頭の書である『開目抄』二巻を与えられております。また、様々な激励も受けておりました。特に極楽寺良觀の信奉者であった主人の江馬^{みつとき}光時を折伏したために領地を減らされるということがあり、さらに建治三（一二七七）年には、^{くわがやつ}桑ヶ谷の竜象房の法座にあって、^{さんみ}三位房が竜象房を論破した件で同僚から^{ざんげん}讒言されてしまい、主人の江馬氏の^{ふきょう}不興を買って所領を没収されたこともあるのです。この時、大聖人様は四条金吾に代わって江馬氏に『頼基陳状』（御書一一二六^{したた}）を認められております。このなかで、四条金吾親子の江馬家への忠誠、竜象房の非道・謗法、主人の謗法を誡めて正法へ帰依させるのが家臣としての道であるということなどが、^{るる}縷々述べられています。そのおかげで、翌建治四年ごろには江馬氏の^{かんき}勘気が解けて所領も倍増され、主人よりさらに深い信任を受けることになったのです。

そして、弘安五（一二八二）年の大聖人御入滅の折にも、最後まで看病に当たり、葬送の列にも加わっております。

ただいま拝読いたしました本抄は、別名を『此^{しきょうなんじ}經難持書』とも言います。四条金吾は、先に江馬氏を折伏したことが原因となって、主君の不興を買い、同僚からもねたまれて苦境に立たされておりました。そこで四条金吾は法華經の、

「現世安穩。後生善処」（法華經 二一七^す）

という經文について、弁阿闍梨日昭にこれを尋ね、それを弁阿闍梨日昭が身延に来て、大聖人様にお伝えしたのです。そこで大聖人様が本抄を送って、「此經難持（此の經は持ち難し）」と説いて覚悟を諭され、大難が起これば起こるほど正しい法であることを確信し、この正法を持ち続けるならば、必ず無上の仏道を得ることができる。そのためには南無妙法蓮華經を念ずることが一番大切である。この妙法蓮華經を持つことは元々難事であるが、実はこの難事を乗りきることが信心の上では最も肝要であると仰せになり、励まされているのです。

この御文の内容を通読しますと、「法華經の法師品には『難信難解』とあるけれども、法華經を聞き受ける人は多い。しかし『憶持^{ふも}不忘』の人、つまり、いついかなる場合も正

法受持の心を忘れず、いかなる大難が襲い来たろうが、たじろがずに信仰を貫き通す人はまれである。まことに受けることはたやすく、持つことは難しいのである。だが、それを持ってこそ、成仏ができるのである。それ故に、この法華経を持つ人は必ず難に値うのだと心得て、御本尊を持つべきなのである。されば『則為疾行無上仏道』は疑いないのである」ということであります。

「則為疾得無上仏道」というのは法華経見宝塔品の文でありまして、「則ち為れ疾く無上の仏道を得たるなり」と読み下します。仏滅後の末法において妙法蓮華経を信受することによって、速やかに無上仏道、成仏の境地を得ることができるとの意味であります。ここにある「疾得」とは、速やかに得ることです。「速疾頓成」という言葉がありますけれども、それと同じで、つまり即身成仏のことです。

御法門の上から言いますと、爾前の円である華嚴経などにもこれが説かれております。けれども、爾前権経におけるものは、いわゆる二乗や女人の成仏がいまだ説かれておらず、十界に差別があり、十界互具が説かれていないわけです。また、それを説く仏様も、あくまでも始成正覚の仏様であります。ですから、本因の下種が去だ定まっていないという状態です。要するに、真の即身成仏とはいまだ言えないわけですから、法華経に至って初めて、速疾頓成が名目だけでなく実義として具わってくるのであります。華嚴経などに名目としてあったとしても、これらは全く名ばかりの成仏なのであり、法華経を信することによって、初めて「則為疾得無上仏道」を成ずることができるのです。

この御文で大事なことは「受くるはやすく、持つはかたし」ということであります。これは個人個人の信心においても大事ですが、支部全体として考えても、とても大事であります。

今日お集まりの皆さん方は幹部でありますから、これからたくさん折伏していかれることと思います。折伏したら、その人をしっかりと育てていかなければ意味がありません。私が平成二十七年までに法華講員五十パーセント増ということをお願いしたのは、今の講員数の五十パーセントを折伏しなさいという意味ではありません。あくまでも、法華講員を五十パーセント増やしてくださいと申し上げているのであります。

どこが違うのかお解りでしょうか。仮りに一つの例として、ある支部で年間百人の折伏成果を挙げたとします。その百人が順調に育ってくれば、計算どおりに計画が進行していきますけれども、なかなかそうはいかないケースもあります。また、以前から信心していらっしやった方でも、例えばお年寄りの方が病気で亡くなる場合もあります。また、せっかく信心をしたのに、退転してしまう方もいるかも知れません。ですから、百人を折伏して入信させても、年間で集計してみると、必ずしも百人増えていないのです。つまり、五十パーセント増というのは、実際に五十パーセント分の法華講員を増やしていくことなのです。

そのためには、やはり育成が必要なのです。どういう育成をし、どういう法華講員に育

て上げればいいのか。それは簡単であります。折伏をする法華講員に育てればいいのです。育成とはそういう意味であります。ただ御授戒をいただいて御本尊様をお受けした。そして、そこそこ信心に励んでいるというのではなくして、折伏された人が、今度はほかの人を折伏できるように育成してあげるのが、今の我々の役目なのであります。そうでなければ、実際に振り返ってみたら五十パーセント増えておらず、「折伏はちゃんとやったんだけどなあ」と困ってしまうのであります。そういう意味で「受くるはやすく、持つはかたし」とあるように、折伏したあとの育成ということがとても大事なのです。

折伏と育成、これらは両方とも化他行であります。つまり相手を折伏し、その人がほかの人を折伏できるような一人前の法華講員に育てる。これらは全部、化他行であります。そういう意味が、この五十パーセント増というなかには込められているわけです。特に皆さんは、御自分でも折伏するでしょう。あるいは仲間の方々が折伏するでしょう。そうして入信した人々が立派に折伏できるようになるまで、是非、育ててもらいたいのです。

そのなかで、一番最初になすべきことは、いつも私が申し上げていることなのですが、なにしろまずお山に連れてきて、御戒壇様にお目通りさせていただくことが大切であります。

「須弥山しゆみせんに近づく鳥は金色こんじきとなる」(御書 一〇五四)

という御聖訓があるでしょう。今、宗門では支部総登山ということも実施しておりますからその時でも結構ですが、色々な縁故がありましようから、あるいはそれよりも早くにお山に連れてきて、なにしろ御戒壇様にお目通りさせてあげる。そこから命が変わってくるのです。皆さん方にもそういう経験がありませんか。

そのように、一つひとつ育てて、その人が折伏できるようにしていくということがとても大事だということでもありますので、この点をお忘れなく、皆さん方はそういうことをお役目としてやっていただきたいと思います。

次に 14『阿仏房御書』です。

14 阿仏房御書

今日蓮いまが弟子だん檀那な又々かくのごとし。末法いに入いって法華經なんによを持つ男女ほかのすがたより外には宝塔ほくたうなきなり。若し然もれば貴賤しか上下きせんをえらばず、南無妙法蓮華經なんぶみょうほつれんげととなふるものは、我が身また宝塔ほくたうにして、我が身また又多宝如来またなり。妙法蓮華經みょうほつれんげより外に宝塔ほくたうなきなり。法華經の題目い宝塔ほくたうなり、宝塔ほくたう又南無妙法蓮華經なんぶみょうほつれんげなり。今阿仏房上人いまの一身いは地水火風空の五大いなり、此の五大いは題目いの五字いなり。然れば阿仏房いさながら宝塔ほくたう、宝塔ほくたうさながら阿仏房い、此より外これの才覚わやく無益むいなり。(御書七九二一三行目)

この『阿仏房御書』は、文永十二(一二七五)年の三月十三日、大聖人様が五十四歳の

時に、佐渡の阿仏房に与えられた御書であります。内容は、阿仏房から法華経見宝塔品における宝塔涌現ゆげんの意義を質問されたことに対してのお答えであります。

すなわち、宝塔とは御本尊のことであり、南無妙法蓮華経と唱える者はその身が宝塔であり多宝如来であると述べられています。また、阿仏房を「北国の導師ほっこく」とされ、浄行菩薩が生まれ変わって大聖人おとずを訪れるのかとまで言われて、深い信心めを愛でておられます。

この阿仏房という方は、俗名は遠藤左衛門尉さ え もん の じょう た め も り 為盛じゅん と く じょう こう と言います。もとは順徳上皇ほくの北面めんの武士でありました。北面の武士というのは院の御所の北面に詰めて、中の警備に当たった武士のことです。

承久三（一二二一）年に承久の乱が起りましたが、承久の乱というのは、後鳥羽上皇ご と ぼが鎌倉幕府打倒のために兵を挙げ、結局、幕府に鎮圧された事件であります。この時、後鳥羽・土御門・順徳の三上皇が配流、島流しにされてしまい、朝廷方の公卿くぎょうや武士の所領も没収されて、乱ののちには幕府の絶対的な優位が確立したとされます。

この承久の乱に敗れて順徳上皇が佐渡に流された時、阿仏房は上皇と共に佐渡に来て、定住したと伝えられております。しかし一説には、古くから佐渡にいた人ではないかとも言われておられて、定かではありません。いずれにいたしましても、日蓮大聖人の佐渡在島中に、塚原三昧堂さんまいどうで大聖人ろんきつを論詰しようとして、かえって大聖人様の化けに触れて念仏を捨て、妻の千日尼と共に帰依をした人であります。以来、文永十一（一二七四）年に大聖人様が佐渡流罪を赦免となって鎌倉に帰られるまでの二年余りの間、大聖人に給仕をし、大聖人の身延入山後も、高齢の身でありながら三回にわたって身延たずを訪ねています。そして弘安二（一二七九）年三月二十一日、九十一歳で亡くなられたと伝えられています。

よく「御登山は阿仏房の精神で」と言われますけれども、まさによわい 齢九十にならんとする年老いた方が、わざわざ山海を隔てた佐渡から身延の山に三度にわたって御登山せられたということは、まことに尊いことでもあります。また、阿仏房の奥さんの千日尼も非常に信心が強盛な方であり、夫婦そろって信心が強盛なのですが、今申し上げたとおり、最初は大聖人をやっつけようと、大聖人様の所へ出向いていったのでありますが、反対に折伏をされて、このような強盛な信者になったのであります。

さて、テキストに挙げた御文の最初に「今日蓮が弟子檀那又々かくのごとし」とあります。これはどういうことかと申しますと、先程も言ったように、この御書は佐渡の阿仏房から見宝塔品の宝塔涌現の意義を質問されたことに答えられたものであります。

そもそも、宝塔とは七宝しつぽうをもって莊嚴された塔で、これは法華経の見宝塔品第十一に説かれております。いわゆる地より涌出した多宝塔のことで、高さ五百由旬ゆじゅん、縦広二百五十由旬の大きさで、このなかに宝浄世界の多宝如来の全身を収めているとされます。

この宝塔涌現について、天台大師は『法華文句』のなかで。

「塔出なに両と為す。一に音声おんじょうを發して以て前を証し、塔を開して以て後を起す」（学林版文句会本下 六〇）

と述べております。つまり宝塔の出現には、^{しょうぜん きご}証前と起後の二つの意味があるということです。

「証前」とは、この宝塔品の前に説かれた迹門の内容を証するという意味でありまして、法華経の会座では、宝塔の中から多宝如来が迹門前十品の内容が真実であると証明したことを言うのであります。すなわち多宝如来は、

「^{ぜんざい}善哉善哉、^よ釈迦牟尼世尊、能く平等大慧・教菩薩法・^{だいしゅ}仏所護念の妙法華経を以て、大衆の為に説きたもう。是の如し、是の如し。釈迦牟尼世尊、所説の如きは、皆是れ真実なり」(法華経三三六)

と証明しております。つまり釈尊の説かれた教え、法華経は間違いなく真実であるということを示したのであります。これが証前で、^{さき}前の迹門を証するという意味であります。

また「起後」というのは、^{のち}後に説かれる本門を起こすという意味でありまして、これも『法華文句』のなかに。

「起後とは、^も若し塔を開かんと欲せば^{すべから}須く分身を集むべし。玄を明して付嘱せんとす。声は下方に徹し本の弟子を召して寿量を論ず」(学林版文句会本下 九)

と説かれております。つまり釈尊の十方分身の諸仏が集まって宝塔が開かれ、多宝如来と釈迦如来の二仏が並んで座る「^{びょうざ}二仏並座」をしたことが、滅後の弘通を付嘱すべき地涌の菩薩を召して寿量品が説かれる^{おんじよ}遠序になっているということです。遠序というのは、本門の^{じよ}序・^{しやう}正・^{るつう}流通の序分よりも、さらに先に示される遠い序という意味で、宝塔涌現が寿量品の説かれる遠序になっているということでもあります。

この証前と起後の二義のうちでは、証前が^{ぼう}傍、起後が正であり、さらに本迹二門では、もちろん迹門が傍、本門が正であります。また釈尊在世と滅後末法を比較すれば、在世は傍、滅後は正であります。すなわち証前起後の宝塔とは、末法に弘通すべき三大秘法の御本尊を説き起こし、かつ証明するところにその意義があるということになるのであります。

また、テキストに挙げた御文の直前には、

「^{しよせん}所詮三周の声聞法華経に来たりて己心の宝塔を見ると云ふ事なり」(御書七九二)とおっしゃっているのですが、これは釈尊在世の化導において^{ほっせつ ひせつ いんねんせつ さんしゅう}法説・譬説・因縁説の三周の声聞が法華経に来たって、己心に具足している宝塔を見て、つまり己心のなかに持っている宝塔を覚知して即身成仏したことを仰せられているわけでありまして。法華経が説かれる以前の三周の声聞は、四十余年の長い間、小乗に執われて身心を滅し、^{かたよ くら}偏った空にのみ入らんとし、自らの命が妙法の当体であるという、この大事なことが自覚できないために成仏できなかったわけでありまして。それが法華経に来て、自己の心に^{えんねん}宛然として、つまりそっくりそのまま、宝塔すなわち妙法蓮華経であることを悟り、仏様に成ったということです。

したがって、「今日蓮が弟子檀那又々かくのごとし」と仰せになっている意味は、三周の声聞が法華経に来て己心に具わっている妙法蓮華経の宝塔を覚知したように、今、日蓮

の弟子檀那もまた、それぞれの己心に具足している宝塔、妙法蓮華經を見ることができ、即身成仏することができるとの仰せなのです。

その宝塔とは、あとの御文に「法華經の題目宝塔なり、宝塔又南無妙法蓮華經なり」と仰せの如く、寿量品文底の妙法蓮華經の大御本尊のことを意味しているのです。そして、皆さん方の命のなかにはみんな、すばらしい仏性がある、仏性があるということは宝塔、妙法蓮華經をきちんとお持ちになっていらっしゃるということです。

もちろん、私達は凡夫だから、なかなかそれが開發されないのです。つまり、いくら仏性があっても、実際にはなかなか成仏できないのです。『三世諸仏総勘文教相廢立』のなかに。

「三因仏性は有りといえど 雖も善知識の縁に値はざれば、悟らず知らず顕はれず」（同 一四二六頁）

とお示しのように、どんなにすばらしい仏性、南無妙法蓮華經をお持ちだったとしても、正しい縁に出会わなければ「悟らず知らず顕はれず」なのです。

だから御本尊様の縁はとても大切なのです。御本尊様の縁によって、すべての人が持っている仏性、南無妙法蓮華經が顕れてくるのでありますから、常にお題目を唱え、大御本尊様の縁に触れて行動していくことが大切なのです。

やはり、縁に触れなければだめなのです。世間でも「縁なき衆生は度し難し」と言いますが、御本尊様の縁に触れるということの尊さ、なканずく総本山にお参りして戒壇の大御本尊様にお目通りするその功德というものは、本当にすばらしいものがあるのです。それを知らず、その縁に触れないままだと、「悟らず知らず顕はれず」ということになるのです。そうすると、ずっと一生、いや、二生、三生、十生そのままで行くこととなりますので、それはもう苦しみ的人生でしかないわけです。そういった命になってしまっただめです。だから我々は御本尊様の縁に触れると同時に、多くの人達にこの縁に触れさせていかなければならないのです。そして共に題目を唱え、折伏をしていけば、必ずその人の仏性も開かれてくる、南無妙法蓮華經が開いてくるのです。このことをしっかり知らなければならぬと思います。

また「末法に入って法華經を持つ男女のすがたより外には宝塔なきなり」と仰せですが、これも今言った意味と全く同じです。もちろん、このなかで「法華經」とおっしゃっているのは、いわゆる文上脱益の法華經ではありません。法華經本門寿量品文底秘沈の妙法、すなわち三大秘法の随一たる本門の本尊のことです。故に、この本門の本尊に信心を起し、これを受持する男女の姿は、まさしく尊い宝塔そのものであり、また宝塔の本体はそれ以外のどこにも求めることはできないと説かれているわけです。つまり、この文は「法華經」すなわち三大秘法の随一、本門の本尊を受持する以外には、我が身を宝塔とする道はないという意味であります。我々はこの御文をよくよく銘記して、自行化他のお題目をしっかりと唱えていくことが大切であります。

続いて「^も若し^{しか}然れば^{きせん}貴賤上下をえらばず、南無妙法蓮華經ととなふるものは、我が身宝塔にして、我が身又多宝如来なり」とおっしゃっておりますが、本当にこれはすばらしい、尊いことでもあります。お題目を唱えていく者は「我が身宝塔にして、我が身又多宝如来」であると、仏様に成るとおっしゃっているのです。

もともと、この法華經のなかには、^{しも}下地獄より^{かみ}上仏界に至るまでの成仏に区別がなく、十界互具が説かれているわけでありまして、すべての衆生を救済しうる偉大なる教えがこの法華經であります。したがって、貴きも賤しきも、上も下も、賢者も愚者も一切区別なく、ただ一心に本門の本尊を信じて題目を唱えるときは、我が身は地水火風空の^{ごだいわごう}五大和合なる宝塔であって、また永遠の生命の上に自在に生滅し、正法正義を証明する多宝如来であると仰せられているのであります。

もちろん、このように仰せあそばされているのは、題目を唱えていくということが根本になっております。「若し然れば貴賤上下をえらばず、南無妙法蓮華經ととなふるもの」が初めて、そのようになるということです。

次に「妙法蓮華經より外に宝塔なきなり。法華經の題目宝塔なり、宝塔又南無妙法蓮華經なり」と仰せであります。この御文は、本門の本尊の意義をもって宝塔の^{たい}顕すところの体が妙法蓮華經であると示されております。つまり大聖人様の弘通あそばされる妙法蓮華經は、久遠元初の^{じじゅゆうほうしん}自受用報身の^{のうしょう}能証・^{ほつたい}所証の法体を末法に移して、本仏大聖人様出世の本懐たる事の一念三千人法一箇独一本門の、いわゆる本門の本尊に存しているわけでありませう。

多宝如来の宝塔は、本地久遠元初の自受用身が^{しゃく}迹を^た垂れ、インドに出現した釈尊の化導のなかにおいて涌現したものであります。本門寿量品文底の眞実相より見れば、この宝塔とは根本の久遠元初自受用身の色法たる地水火風空の五大を顕しているのであり、また、この地水火風空はそのまま心法を具して不思議なる故に妙法蓮華經の五字なのであります。故に「妙法蓮華經より外に宝塔なきなり。法華經の題目宝塔なり」と仰せられている「妙法蓮華經」とは、久遠元初自受用身の人即法の当体を示されたものと拝せられるわけでありませう。

したがって、この御文は南無妙法蓮華經の御本尊こそ宝塔の実体であることを解説あそばされているのであります。故に宝塔を仰ぐことの本義は、末法出現の宗祖大聖人の御魂魄たる、寿量文底の義による南無妙法蓮華經の御本尊を信ずることであるとの御教示と拝すべきであります。

次に「^{いま}今阿仏上人の一身は地水火風空の五大なり、此の五大は題目の五字なり」とありますが、阿仏房および一切衆生の一身は皆、地水火風空の五大から出来ております。つまり万物は全部この地水火風空の五大から出来ているということでありませうので、阿仏房も、また一切衆生も同様であります。

この五大は何かというと、妙法蓮華經の五字であると仰せになっております。『御義口

伝』のなかには、

「我等が頭こうべは妙なり、喉のんどは法なり、胸は蓮なり、胎はらは華なり、足は経なり。此の五尺の身は妙法蓮華経の五字なり」(同 一七二八頁)

という甚深の御法門がお示しあそばされてあります。つまり、この御文から拝しますと、私達のこの身体は地水火風空の五大であり、その地水火風空の五大とは妙法蓮華経であるということは、私達の一身が即、妙法蓮華経の五字であるということになるわけです。それほど我々の身体は尊いのです。しかし先程も言ったとおり、それは理の上においてはそうだけれども、あくまでも大御本尊の縁に触れなければ、己心の妙法蓮華経が妙法蓮華経として開いてこないのです。縁に触れなければ、凡夫のままなのです。そこに、御本尊に向かってお題目を唱えていくことの大きな意義があるわけです。

また『三世諸仏総勘文教相廃立』のなかには、

「五行とは地水火風空なり(中略)是則ち妙法蓮華経の五字なり。此の五字を以て人身の体を造るなり。本有常住ほんぬじょうじゅうなり、本覚の如来なり」(同 一四一八頁)

と、このようにまでおっしゃっておられます。もともと私達は、すべてが妙法蓮華経つまり本有常住、本覚の如来であるとおっしゃっています。さらにまた、同じ御書のなかでは、

「釈迦如来五百塵点劫の当初、凡夫にて御坐せし時、我が身は地水火風空なりと知ろしめして即座きとに悟りを開きたまひき」(同 一四一九頁)

と、御本仏の五大は法界の五大であると仰せであります。法界の五大は衆生一人ひとりの五大なるが故に差別なく、色心ともに七宝をもって莊嚴された仏様の宝塔と衆生の身体とは全く異なりません。もちろん、これは信心がなければだめなのですが、信心を發おこして題目を唱えるところ、妙法蓮華経の宝塔の功德は凡夫の阿仏房の一身にあると示されているのです。よって我々も、末法の正境たる本門の本尊に向かって信心を發おこすとき、十界本有そんぎょうの尊形、事の一念三千の本尊の功德は我が心に染み入り、境は智みょうに冥おじて仏界即九界の下種本因妙を成ずるのです。また口に自受用身の色心たる妙法蓮華経を唱えるとき、智は境がに合あひ冥おじ、我が九界の当体すなわち本尊の仏界と顕れ、九界即仏界の下種本果妙を成じ、速やかに即身成仏の本懐を遂げるわけであります。

すなわち、宝塔とは南無妙法蓮華経の御本尊であり、「今阿仏上人の一身は地水火風空の五大なり、此の五大は題目の五字なり」と仰せのなかに、法華経に説かれる莊嚴無比の宝塔といっても実は他の何物でもなく、衆生自身の命、我々そのものを顕しているという御教示を、よくよく拝していきべきであります。

だから、私達一人ひとりとは末法あらぼんぶの荒凡夫ではあっても、その実は妙法蓮華経の当体である、宝塔そのものであるというすばらしい御教示を拝して、一人ひとりがしっかりと題目を唱えていくということが大事だと思います。

宇宙万物を構成している地水火風空は、そのまま我々人間の生命の構成要素でもあるわけです。そして、この地水火風空の五大とは妙法蓮華経の題目にほかならず、その法華経

の題目がすなわち宝塔に象徴するところの当体でありますから、地水火風空の五大から成っている我々の生命自体が宝塔だという本当に尊い御教示をいただいて、我々は自分自身をもっと大切にするとともに、しっかりと南無妙法蓮華經と唱えていかなければなりません。

このことは今日来ている方々が知るばかりでなく、すべての人達にそのすばらしい宝塔、妙法蓮華經が存しているということを知らしめなければだめなのです。だから折伏をたくさんしなければなりません。先程も言ったように、いくら妙法蓮華經というすばらしい仏性を持っていても、正しい縁に値わなければ、宝塔が宝塔としての、妙法蓮華經が妙法蓮華經としての用^{はたら}きをしないのだから、なんとしても縁をさせるということが大事であります。そこにまた、折伏の大事が深く存しているのであります。

次に 15『法蓮抄』に入ります。

15 法蓮抄

心ざしなくとも末代の法華經の行者を讚^ほめ供養せん功德は、彼の三業相応の信心にて、一劫が間^{しょうしん}生身の仏を供養し奉るには、百千万億倍すぐべしと説き給ひて候。これを妙^{みょう}楽大師は福過十号とは書かれて候なり。(御書八一三^ご一行目)

この御書は、大聖人様が身延から曾谷教信入道法蓮に与えられた御書であります。曾谷入道殿の法名が法蓮でありますことから、『法蓮抄』と言われております。

内容は、法蓮が亡父追善のために法華經を転読^{てんどく}したのですが、この転読というのは、經文の主要な数行のみを説誦することでありまして、真読に対する言葉です。真読とは初めからすべて読んでいくことです。このように、法蓮が転読したことと、また毎朝読んでいる自我偈の功德を、このあとに出てまいります烏^{おりょう}竜・遺^{いりょう}竜の二人の例を引いて、法華經は一々の文字が皆、生身の仏であることを示されています。そして法蓮の追善供養こそ、真の孝養であると教えられているのであります。また、大聖人様の受けた様々な難を挙げて、大聖人様が末法の法華經の行者であることを示されております。

その内容から、この『法蓮抄』は異名^{いみょう}・異称として『烏竜遺竜御書』とも言われております。この烏竜・遺竜というのは、中国古代の書家でありまして、烏竜が父、遺竜が子供であります。親子ともに優れた書家として有名であったのでありますが、親の烏竜は道教を信仰していたために仏教を嫌い、書家でありながら仏典の法華經等の書写をしなかったのです。そして、臨終の時に仏典、特に法華經を書写してはならないと、子供の遺竜に遺言するのです。そのために父の烏竜は無間地獄に堕ちたということでもあります。

子供の遺竜は父の遺言に従って仏典を書写しないと誓ったけれども、国王の司馬氏の強い命^{めい}を断りきれず、法華經八卷の題号、六十四文字だけを書写したのです。すると、その

夜、夢で六十四の文字が六十四の仏となって、父の烏竜を地獄から救う姿を見たという話であります。

この烏竜・遺竜については、詳しくは『平成新編御書』の八百十六ページに載っています。これを現代文に約しますと、烏竜という書家は字を書くことが上手であったので、人々がこれを用いた。しかしながら、仏経だけはどのように頼んでも書かなかった。最後臨終の時に息子の遺竜を呼んで「おまえは我が家に生まれて芸を受け継いだ。私の孝養のためには仏経を書いてはならない。特に法華経を書くことのないように。我が本師である老子は天尊である。天に二つの日はない。それなのに、かの法華経のなかには『唯我一人』といって、『ただ我れ一人のみ』と説いており、けしからん。もし遺言に違えて法華経を書くようなことがあったならば、すぐに悪霊となって、おまえの命を断つであろう」と言いながら、この烏竜は舌が八つに裂けて、頭が七分に破れ、眼耳鼻舌身の五根から血を吐いて死んでしまったのです。

しかしながら、その子・遺竜は法の善悪を弁えていなかったもので、我が父が謗法の故に悪相を現じて阿鼻地獄に墮ちたとも知らずに、遺言を守って仏経を書くことをせず、ましてや口に誦することもありませんでした。

こうして時が過ぎていくうちに、時の王である司馬氏が、仏事の時に経を書写することになって、中国一の書道家を尋ねられた結果、遺竜に決定したのであります。

王様が召して命じたところ、この遺竜は再三にわたって辞退をするのです。それは親の「お経は書いてはいかん」という遺言があったので辞退したのです。やむをえず他の書家に一部の経を書かせられましたけれども、王様は気に入らなかった。それで、なおも遺竜を召して「おまえが親の遺言だからといって、私が命ずる経を書かないということは理由にならないことであるけれども、一往、それは許してやろう。ただ題目だけは書きなさい」と三度、命じた。しかし、遺竜はなおも辞退したのです。大王は気色ばんだ顔で「天地であっても王の支配するところである。そうであれば、おまえの親はすなわち私の家来ではないか。私事をもって公のことを軽んずることがあってはならない。だから題目だけは書きなさい。もしそうしないのであれば、仏事の場合であっても速やかにおまえの首を刎ねるであろう」と言われたので、とうとう遺竜は、題目だけは書いたのです。

どのように書いたのかというと、法華経は全部で八巻に分かれているので「妙法蓮華経巻第一」「妙法蓮華経巻第二」という八字を八巻分、つまり六十四字だけを書いたのであります。

そして書き終わって、夕暮れに自宅に帰り、「私は親の遺言に背いて、王の命令に仕方なく従ってお経を書いてしまい不孝の者となってしまった。きっと天の神も地の神も瞋って、私のことを不孝の者と思っているだろう」と嘆いて寝たのです。

ところが、夜、寝ている時に夢のなかに大光明が出現して、朝日が照らしているのかと思っていると、天人が一人、無数の眷属を引き連れて庭の上に立たれ、さらにこの天人の

頭上の虚空^{こくう}に六十四の仏様がおられたのです。

そこで、遺竜が合掌して「あなたはいかなる天人でいらっしゃいますか」と問うと、その天人は答えて、「私はおまえの父の烏竜である。仏法を誹謗したために舌は八つに裂け、五根から血を出して、頭は七つに割れて無間地獄に墮ちてしまった。臨終の時の大苦でさえ耐えられるとも思われなかったのに、無間地獄の苦しみは、さらにその百千億倍であった。人間の世界で、鈍刀でもって爪をはがされ、のこぎりでもって首を切られ、火の上を歩かされ、棘^{いばら}のなかに閉じ込められたりした人の苦しみも、この苦しみに比べればもの数ではない。どうにかして我が子に告げ知らせようと思ったけれども、かなわなかった。臨終の時、おまえを誡めて『仏経を書くな』と遺言したことの悔しさは、言いようのないことであった。後悔先に立たず、我が身を恨み^{うら}、舌を責めたけれども、なんの甲斐もなかった。

ところが、昨日の朝から法華経の始めの妙の一字が無間地獄の鼎^{かなえ}の上に飛んできて、変じて金色^{こんじき}の仏様となった。この仏は三十二相を具え、顔つきは満月のようであった。大きな声を出して『たとえ法界に遍満^{へんまん}するほどの、善根のすべてを断ち切ってしまった諸々の衆生であっても、ひとたび法華経を聞くなれば、必ず菩提を成ずるであろう』と説いた。この文字のなかから大雨が降ってきて無間地獄の炎を消し、閻魔王^{かんむり}は冠^{うやま}を傾けて敬い、獄卒^{ごくそつ}は杖を投げ捨てて立っており、すべての罪人は何事かと慌^{あわ}てていた。

次にまた法の一字が来て、前と同様であった。その次の蓮の字、その次に華、そしてまた経と、このようにして六十四字が飛び来たって六十四の仏となった。無間地獄に仏が六十四体おられるので、六十四の日月が天空に出現したようなもので、天からは甘露^{かんろ}、甘い雨を降らしてそれを罪人に与えた。

『いったい、これらの大善事はどういうことなのでしょう』と、罪人らが仏に尋ねたところ、六十四の仏が答えて言うには『我らの金色の身体^{せんだん}は梅檀や宝山から出現したものではない。この身は無間地獄にいる烏竜の子の、遺竜が書いた法華経八巻の題目の六十四文字である。かの遺竜の手は、烏竜が生んだところの身体の一分であるのだから、遺竜が書いた文字は烏竜が書いたことになるのである』と説いた。それを聞いて無間地獄の罪人らは、我らも娑婆にいた時には子供もあり、妻もあり、眷属もいた。なのに、どうして吊^{とむら}ってくれないのだろうか。また吊っても、善根の力が弱くてここまで来ないのだろうか。と嘆くだけでも、なんの甲斐もなかった。しかし、一日・二日、一年・二年、半劫・一劫と経って、このように仏様^{とう}が出現して我々も助けられたと喜び、共に眷属^{とむら}となって忉利天に登ることになり、まずおまえを拝してと申して来たのである』と語った。

遺竜は夢のなかで、またいつの世にか会おうと思っていた親の姿を見て、さらには仏をも拝することができ、うれしさが身にあふれるほどであった。

六十四の仏が語って言うのには「我らには別の主はいない。あなたは我々の檀那である。今日からあなたを親^{とむら}と思つて守護しよう。だから、あなたは信心を怠^{とむら}ってはならない。一

生が終わる時には必ず迎えに来て、都率の内院に導こう」と約束されたので、遺竜はとりわけ、かしこまって「今日以後は外典の文字を書くまい」と誓った。これは、かの世親菩薩が小乗経を二度と読誦しないと誓ったことや、また大聖人が念仏を唱えまいと誓願したようなものであった。

そして夢から覚め、このことを王に申し上げたところ、大王は「この仏事は既に成就した。このことを願文に書き留めよ」と仰せられ、そのとおりに行われた。

かくして中国・日本は法華経を信ずるようになったのである。この物語は中国の『法華伝記』に書かれている、ということでもあります。

長くなりましたが、要するに、子供の遺竜が親の遺言によってお経を書かなかったけれども、王様の命でしぶしぶ法華経の六十四字だけを書いたその功德によって、親を救い、多くの人達を救ったということです。

法華経には五種法師ということが説かれておりますが、これは受持・読・誦・解説・書写の五つの修行法であります。受持とは受け持つこと、読はお経を見て読むこと、誦はお経を誦すること、解説は説くこと、最後の書写はお経を書き写すこと、これら五つの修行があるのだけでも、法華経を書き写しただけでも、これほどすばらしい功德、親を救う大きな功德があり、さらに地獄にいた多くの人達をも救う大きな功德があるのだということをおっしゃっているわけです。そして、ましてや法華経を読誦する功德は、この書写の功德よりもさらに勝れているのだということをおっしゃっているのです。

さらにもう一つ、大事なことがあります。この受持・読・誦・解説・書写の五種法師の修行は、末法においては受持の一行にすべて収まるのです。受持には、総体の受持と別体の受持という御法門がありまして、別体の受持とは受持、読、誦、解説、書写という一つひとつを別して論ずるなかの受持を言い、総体の受持とは受持のなかにそのほかの読・誦・解説・書写の四つが含まれているということでもあります。

つまり、末法の修行としては読、誦、解説、書写を各別に行う必要はなく、受持のなかにそれらのすべてが含まれているのであります。よく邪宗では写経などと言って、どういう意味で修行をしているのかも解らないで、書写行と称してやっているけれども、そういう修行は必要ないのです。

末法の受持というのは、御本尊を受け持つということなのです。御書に、

「信力の故に受け念力の故に持つ」（御書 七七五頁）

とあるように、信念力をもって御本尊様をお持ちすることを受持と言うのであります。

ここで説かれる遺竜の書写の功德よりも、さらに読誦の功德が勝っていますが、さらに言えば、この受持の一行のなかにほかの四つの修行が収まっているわけだから、その功德も全部収まっていることになるのです。つまり我々が御本尊様を受持信行するその功德というのは、遺竜の書写の功德よりも千万億倍、勝れているということなのです。ですから、言い換えるならば、この御本尊様の功德というものがいかに大きいかということをおし

やっているのです。

このように考えてくると、我々が行っている普段の朝夕の勤行をはじめ、いわゆる折伏行を含めた自行化他の修行、それらをまじめにコツコツとやることがいかに大事であるかということがお解りかと思うのです。

そういう上から本文に返って言えば、この御文は、法華經の行者を讚歎供養する功德がどれほどすばらしいかということが説かれているのであります。

テキストに載せた御文の前のところから併せて拝しますと、

「このように尊い教主釈尊を、一時二時でなく、一日二日ではなく、一劫の間、^{たなごころ}掌を合わせて両眼で仏の顔を見つめ、^{こうべ}頭を垂れて他事を捨て、例えば頭に^{ついで}点いた火を消したいと思うように、またのどが渴いて水を求め、飢えて食べ物を思うように、絶え間なく供養する功德よりも、たとえ戯言にでも、ひとことでも^{ままはは}継母が^{ままこ}継子を褒めるように、^{こころざし}志なくとも末法の法華經の行者を褒め供養する功德は、かの三業相応の信心にして一劫が間、生身の仏を供養し奉るよりも百千万億倍、勝れていると説かれている。これを妙樂大師は『福過十号』とお書きになっているのである」

ということです。ここで大事なことは「志なくとも」という点であり、釈尊の徳よりも、末法の法華經の行者である御本仏大聖人の徳がはるかに勝れていることを強調あそばされているのです。

前の御文に「たとえ戯言にでも、ひとことでも継母が継子を褒めるように」とある意味は、心ならずもという意味です。継母は継子のことをあまり褒めないようでありまして、現代でも虐待などひどいことがあるけれども、昔から継母と継子は、どうもそういう関係にあるらしいのです。だから、そのように本心ではなく、心ならずも継子を褒めるが如く、たとえ志がなくても末法の法華經の行者を讚歎供養する功德は、三業相応して一劫が間、生身の仏を供養し奉るよりも百千万億倍、勝れているということなのです。要するに、教主釈尊を供養する功德よりも、末法の法華經の行者を供養する功德が勝れているということを、ここで言われているわけなのです。

では、その末法の法華經の行者とはだれのことか。それは、総じては大聖人の門下の弟子檀那のことですけれども、別しては御本仏大聖人様のことでもあります。

「行者」というのは、仏道を修行する者の通称であります。『十章抄』のなかに、

「南無妙法蓮華經と申す人をば、いかなる愚者も法華經の行者とぞ申し候はんずらん」
(同 四六八頁)

とお示しのように、つまり南無妙法蓮華經と唱える者は、いかなる愚か者であったとしても、それは法華經の行者と言うのだと、大聖人様はおっしゃっております。だから、皆さんも法華經の行者なのです。

総じて言えば、南無妙法蓮華經と唱える大聖人様の弟子檀那はすべて法華經の行者であると言えます。しかし、法華經の一文一句を身口意の三業にわたって読まれたお方は、末

法においてはただ一人、日蓮大聖人様以外にはいらっしやらないわけでありませう。

このことは『撰時抄』のなかにも、

「^{きんめい}欽明より^{とうてい}当帝にいたるまで七百余年、いまだきかず、いまだ見ず、南無妙法蓮華經と唱へよと他人をすゝめ、我と唱へたる智人なし。日出でぬれば星かくる。賢王来たれば愚王ほろぶ。実經流布せば権經のとゞまり、智人南無妙法蓮華經と唱えば愚人の此に随はんこと、影と身と声と響きとのごとくならん。日蓮は日本第一の法華經の行者なる事あえて疑ひなし」(同 八六三^〇)

とはっきり仰せられています。また『極楽寺良觀への御状』には、

「日蓮は日本第一の法華經の行者、蒙古国対治の大將たり」(同 三七六^〇)

と仰せられ、『開目抄』には、

「日蓮なくば誰をか法華經の行者として仏語をたすけん」(同 五四一^〇)

と示されています。さらにまた『種々御振舞御書』のなかには、

「^{いま}今日蓮は日本第一の法華經の行者なり。其の上身に一分のあやまちなし。日本国の一切衆生の法華經を謗じて無間大城におつべきをたすけんがために申す法門なり」(同 一〇五九^〇)

とも仰せであります。つまり、天台大師や伝教大師などもおられるけれども、それらの方々は法華經を身口意の三業にわたってはお読みあそばされていないということから、身口意の三業にわたってお読みあそばされたのは古今東西、大聖人様だけであって、末法の法華經の行者とは、別しては大聖人様お一人だけなのです。

だから、その大事な意義の上から『御義口伝』では、

「如来とは^{たぐい}釈尊、総じては十万三世の諸仏なり、別しては本地無作の三身なり。^{いま}今日蓮等の類の意は、総じては如来とは一切衆生なり、別しては日蓮が弟子檀那なり。されば無作の三身とは末法の法華經の行者なり。無作三身の宝号を南無妙法蓮華經と云ふなり」(同 一七六五^〇)

と、法華經の行者とは御本仏の異名であることを明かされているのであります。

かくの如く、法華經の行者とは、総じては今日、血脈正統の大聖人の仏法を捧持信行する本宗の僧俗を指しますが、別しては、末法の御本仏大聖人様ただお一人のことを指すのであります。

また、妙楽大師が示された「福過十号」というのは「福十号に過ぐ」と読みますが、十号というのは仏様の十種の尊称であります。これは如来十号とも言いまして、如来、^{おうぐ}応供、^{せいへんち}正偏知、^{みょうぎょうそく}明行足、^{ぜんぜい}善逝、^げ世間解、^{じょうごじょうぶ}無上士、調御丈夫、天人師、^{かつあい}仏世尊という十種の呼び名があるのです。時間の関係上、これらそれぞれの説明は割愛します。

まとめとして申しますと、この御文は、末法の法華經の行者すなわち大聖人様を讚歎供養する功德は、釈尊を供養する功德よりも百千万億倍も勝れているということをおっしゃっているのであります。それはつまり、文上脱益の教主である釈尊を供養する功德よりも、

末法本因下種の御本仏大聖人を供養する功德のほうが勝れているということでもあります。要するに、あくまでも釈尊は迹仏でありますから、その釈尊よりも勝れているということは、まさに大聖人様は末法御出現の御本仏であるということになるのです。

御書の講義は以上でありますけれども、最初にも申し上げましたとおり、宗門は今、平成二十七年の目標達成へ向けて、みんなで一致協力しております。

そこで、折伏とは何かというと、まず一つ目に、仏様から与えられた尊い使命なのであります。そして二つには最善の仏道修行ということであり、三つには仏祖三宝尊への最高の報恩行であるということです。

このように、折伏にはきちんと意義が存しているのであります。ですから、皆さんが折伏をしているなかにおいて、仏様からの尊い使命を果たしているのだということ、また我々は最高の仏道修行をしているのだということ、それから仏祖三宝尊に対して最高の御報恩の行をしているということ、これらの意義をしっかりと自覚して折伏を行すべきだと思います。

だからこそ、折伏の功德というものは大きいのです。もし行き詰まったら、お題目をしっかりと唱えて、そして折伏を行すべきです。

折伏をするに当たって肝心なことは、やはり唱題です。しっかりと唱題していくことが大事です。唱題をしていくなかに、必ず折伏の命が湧いてくるのです。もちろん唱題が唱題だけに終わってしまってはだめです。それでは自行だけの題目になってしまいます。だから、唱題と折伏を合わせ、自行と化他の二つをしっかりと行っていくということを認識してもらいたいのです。

それからもう一つ、今日は青年部の方々が対象ですから特に申し上げますが、やはり折伏に大事なのは行動力です。行動ですから観念ではありません。皆さんには若さというものがあるのですから、どんどん身体を動かして折伏に馳せ参じてください。それこそ東に用事があれば、また西に用事があれば、どこにでも飛んでゆき、そして折伏に参加してください。また、お手伝いもしてください。そして自らもしてください。そういう若さ、パワーを、あなた達は持っているわけだから、講中には色々な年代の方がおられるわけけれども、やはり青年部が中心になって折伏をしていきますと、支部全体の活発性が違ってきます。

今日、お陰さまで多くの支部が本年度の折伏誓願目標を達成しています。でも、本年度は大中小、いかなる支部も必ず誓願を達成しなければいけません。「私のところはどうか…」などというようなことを頭のなかで考えたら負けなのです。そのようなことは一切考えないで、遮二無二、折伏に邁進していく。そうすると道が開かれてくるのです。開かれないのであれば、それは題目を唱えて折伏を行っていないからなのです。折伏せずに頭で考えるばかりで、「どうしよう、こうしよう、ああしよう」と言っているだけだったら、

それは理の仏法なのです。理の仏法をいくら行じたとしても功德はありません。行き詰まったら題目を唱えて、そして折伏に打って出る。これを飽くなく繰り返して行ってごらんください。その支部は必ず道が開かれていきます。

支部が低迷している時には、やはり若い人の力が必要なのです。もしも低迷している支部があったら、今日から皆さん方が立ち上がってください。皆さん方が立ち上がれば、ほかの婦入部の方も壮年部の方も、みんなが立ち上がります。

だから、まず題目を唱える、これも行動です。折伏に馳せ参ずる、これも行動です。身体で御奉公していくのです。それを繰り返し、飽くなく行じていけば、必ず道は開かれます。やらないで考えてもだめなのです。「どうしよう、ああしよう」などと百万遍、考えたとしても、功德もないし、効果もないのです。皆さん方は若さと行動力を持っているのだから、なにしろ行動をもって御奉公に励んでもらいたいと思うのであります。

本日は、このことを特にお願いいたしまして、私の講義を終了いたします。